

岡山県

街道 1

岡山県の街道遺産の第一は石桁橋である。岡山市内には農業用水が網の目のように走り、旧市街地だけでも 700 以上の中石橋が架かっている。恐らくその大半は近代以降のものと思われるが、昭和戦後にあっても石桁を架けることが“普通”であり続けたほど、この地域では石桁の存在が日常的であった。それらの中の代表格が、秀天橋（玉野市、18 世紀、県史跡）**A** である。全長 36m、9 径間。現存・現役の江戸期の実用石桁橋としては国内最長である。



街道 2

石桁と異なり 1 橋しか存在しないが、岡山には、全国でも類例のない形態の石刎橋が現存する。それが、水迫橋（高梁市、宝永 6 (1709)）**A** である。石刎橋が全国で多い山口県や、岡山県内の他所の石刎橋と異なり、石刎の上に横梁を載せた独自の構造が用いられている。構造上には明らかに不利な形式が取れて採択された理由は不明だが、“造り慣れた石桁

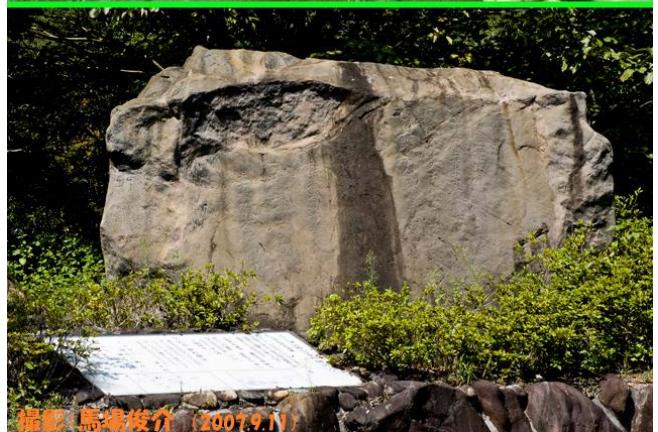


撮影:馬場俊介 (2007.9.11)

橋の石柱を斜めにした”と考えれば、①なぜ横梁があるのか、②なぜ刎石が離散的に配置されているのかが、ある程度理解できる。また、この水迫橋は、山口県最古の石刎橋である盤石橋（1764）より半世紀近く古く、年代の確定している国内最古の本格的な石刎橋である。

舟運 1

岡山には東から吉井川、旭川、高梁川という一級河川が県北まで深く入り込み、傾斜がなだらかという特性もあって中世から河川舟運が盛んであった。江戸初期には角倉了以が吉井川の「舡〔たかせ〕船」を参考に、京都の高瀬川の開削を行ったほどである。



撮影:馬場俊介 (2007.9.11)

笠神の文字岩（高梁市、徳治 2 (1307)、国史跡）**A** は、わが国最古の河川開削記念碑であり、東大寺の再建にあたった宋の伊一族の石工と目される伊行経が、高梁川の支流・成羽川の笠神龍頭の瀬を開削したことを示す貴重な遺産である。

文字岩自体は現在ダム湖の中にあり、渇水期しか姿を現さない（上の写真）。原石があまりに巨大なため、付近に置かれたリプリカ（下の写真）は部分再現である（上の写真の赤線の枠内）。

舟運 2

県内における河川舟運の歴史は古いが、実際の遺構が残っているのは江戸期以降である。それらの中の代表的存在は、勝山船着場（真庭市、室町末起源で現存する水制は江戸期）**A** と三日市船着場（新見市、承応元（1652）頃）**A** である。特に、勝山船着場は江戸期と明治初頭の構造物が渾然一体となり、船着場を主体とした全国でも類例のない優れた河川景観を生み出している。



舟運 3

河川舟運の最後は倉安川である。元々は倉田三新田の用水確保を主目的に既往の用水路や小川を改修する形で造られ、後に沖合に江戸期最大の沖新田が干拓造成されると、ショートカットの利便性により吉井川と岡山城下とを直結する舟運の重要性が高まった。倉安川と吉井川との接点には、用水の取水口に加え、舟運のために吉井水門（岡山市東区、延宝7（1679）、県史跡）**A** が造られた。吉井水門は国内初の運河閘門と位置付けられているが、どこからそのヒントを得たかは不明である（下の写真は、手前が卵型の閘室、正面が第二水門）。



吉井水門は、福岡県の中間の唐戸の建設に際し、堀川工事の役夫頭・一田久作が秘密裏に見分に訪れたことでも知られる。一田は、吉井水門の“閘門”としての二枚扉の機能を、“洪水防御”と誤解して帰国し、中間の唐戸を閘門でもないのに二重扉にしてしまった。

舟運 4

岡山県でもう一つ大切な舟運は、瀬戸内海での海運である。瀬戸内海航路の遺産という観点では、下蒲刈、御手洗、鞆の3港を有した広島県の方が充実しているが、港の防波堤に限定すれば、岡山県には全国の1・2位が現存する。

岡山唯一の瀬戸内海航路の寄港地・牛窓には江戸期最大、長さ 678mの一文字の波止（瀬戸内市、元禄8（1695））**A** が造られた。残念ながら2度にわたる大改修で旧石堤は新規構造物の下に埋没てしまっている（史跡的価値は残る）。一方、避難港であった大多府島の元禄防波堤（備前市、元禄11（1698）、国有形登録）**A** [写真] は、空積された巻石の美しい姿をそのまま残している。双方とも岡山藩郡代・津田永忠が事業の統括責任者であった。

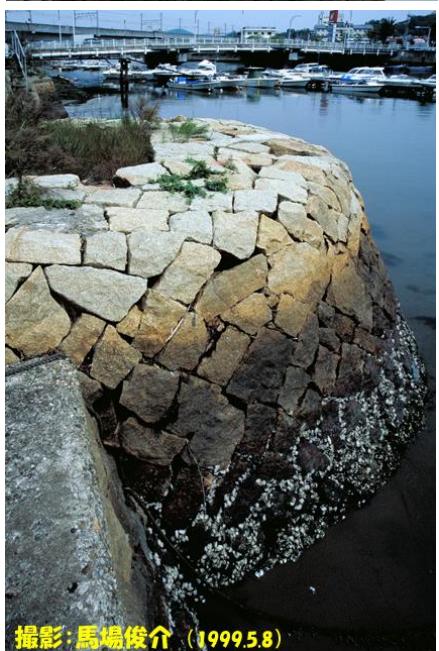


舟運 5

野崎浜灯明台（倉敷市、文久3（1863）、市建造物）**A** は、主要部を木構造とした江戸期の典型的な灯明台の中で高さ 11.23m と最も背が高い（写真は、次ページ）。側壁全面が木造であるため、国内に現存するほとんどの木造灯明台は再現だが、野崎浜灯明台ではオリジナルの軸木を残している点が稀少である。野崎浜への塩買船を導く灯台の役目と、塩釜明



撮影:馬場俊介 (1996.11.23)



撮影:馬場俊介 (1999.5.8)

神宮への献灯を目的に建造された。その意味では製塩遺産の一種と考えることもできる。

産業 1

野崎浜塩田に関わる直接的な塩田遺構が野崎浜塩田の大樋(倉敷市、文政 11 (1828))**B**である。海水の取入口が海面下にあるため石の水制のようにしか見えないが、構造的には石樋である。江戸期の製塩遺産がはつきりした形で残る稀な事例である。

農業 1

岡山県を真に代表するものは、その多様で大規模な農業遺産群の存在である。

まず取水堰であるが、旭川から取水する大井手用水の建部井堰(岡山市北区、享保 6 (1721) 以前)

Aは全長が 620~650m もあり、現存する石堰としては群を抜いて大きい。年代を確定できるものは、享保 6 に描かれた絵図だけであるが、最も蓋然性の高い建設年代は寛永 5-7 (1628-30) 前後と考えられる。堰堤上は全面的に石が敷かれているが、渴水期以外は堰上を水が流れるため右上の写真のように一定の勾配が付けられ、“上流”にあたる左端には大型

の角石が使われ、“下流”にあたる右端は巻石状の石積が見られる。また、旭川は備前と美作の国境であったため、堰は川の中央で終わっている。

撮影:馬場俊介 (2014.1.22)



この全国で唯一残る巨大な取水堰は、岡山市に吸収合併されるまでは建部町の指定文化財であった。しかし合併によって指定が解除され、国重文クラスの貴重な農業遺産が無指定状態のまま宙に浮いてしまっている。幸いに、堰を管理する用水組合が保存に熱心で、堰表面に密生していた雑草を取り除き、長大な斜め堰の建造当初の姿を現代に甦らせた。

農業 2

灌漑用水路に設けられた全国一の水路橋は熊本の通潤橋であり、構造は石アーチである。しかし、江戸期にアーチ技術を知らなかった九州以外の地域では、①石桁で水路橋を造るか、②逆サイフォンを導入する以外に用水路を川と交差させる方法がなかった。全国各地で小規模な石桁水路橋が造られたが、それらの中で群を抜いた存在が田原用水の旧懸樋(赤磐市、元禄 10 (1697) 頃、県史跡) **A**である。この水路橋も、前記 2 つの防波堤同様、津田永忠が関与しているが、岡山における永忠の存在感は非常



撮影:馬場俊介 (2000.11.4)

に大きい。この懸樋では、 $3.2m \times 1.2m$ という大断面を如何に水密性を保たせるかという難問に対し、底面には粗加工の石梁をわざと隙間を空けて並べ、隙間に貝殻混じりの特殊な漆喰を詰めることで対処し、側面は逆に精緻に加工した石梁を3段に積み石材同士を「ほぞ」で密着させることで対処した。

農業 3

岡山藩では、寛文4(1664)、最初の石樋門が造られると、木造樋門は全く造られなくなった(材料である花崗岩の長尺石材が沿岸部で採取でき、舟で容易に運べ、安価だったため)。貞享元(1684)以降、新田開発が盛んになると多くの石樋門が造られた。それらの中で最大の樋門は、時代は下るが、内尾大水門(岡山市南区、文政6(1823)頃) A である。長



撮影:馬場俊介 (1996.5.12)

さ10mの花崗岩(断面:60cm×70cm)の巨大梁を用いたダイナミックな構造は、高強度の花崗岩ならではのものであり、岡山以外では見られない。

撮影:馬場俊介 (2007.6.4)

農業 4

前記の内尾大水門は興除新田の干拓造成に際して造られた。この興除新田は、漁業が盛んだった備中の海岸の沖合に造られた干拓地である。このような“無謀”な計画は、当然備中側の反発に遭い、



提供:岡山大学附属図書館(池田家文庫)

百年にわたる争論の後、文化14(1817)の幕府裁定により、「備中方の新田堤を国境とし、それより海側を備前とする」ことが決まった。その際10基の標石が建てられたが、現在でも6基が残っており、

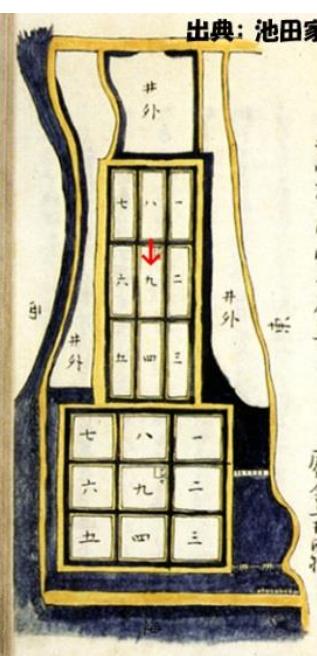


撮影:馬場俊介 (2009.12.25)

全国的にも例のない干拓の歴史を物語る遺産群となっている。上の絵図は「興除新田開発目論見略図」で、ピンクの部分が備中、その下の薄緑の部分が干拓地である。追加した小さな丸は6基の標石の位置

出典: 池田家履歴略記

を表し、赤丸は写真の早島の境界石(早島町、町史跡) B である。



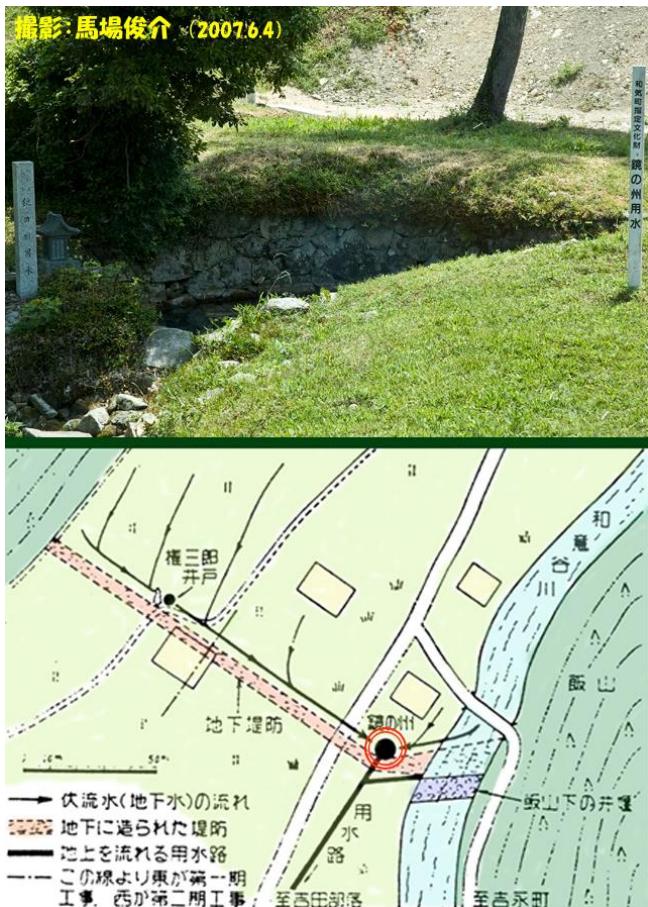
農業 5

全く別種の農業遺産は、津田永忠が藩主・池田光政の意向を受けて造りあげた閑谷学校(後述)を、将来とも安定的に運営

していけるようにするための学校田として開設された友延新田の井田〔せいでん〕(備前市、寛文11(1671))**A**である。3×3の碁盤目状に仕切られた井田(南北2ヶ所)は、儒教の精神に基づき、中央の1区画だけが「公田」として年貢米の対象となり、残りの8区画は「私田」として農民の収入にできるという寛大な制度であった(江戸期の実質税率は20~28%)。ただ、実際には、藩の財政難もあって年貢はすぐに引き上げられてしまったが、国内唯一の実用目的の井田として稀少な存在である。前ページに、写真と、『池田家履歴略記』に記載された絵を示す(絵図中の赤矢印は撮影場所と方向)。

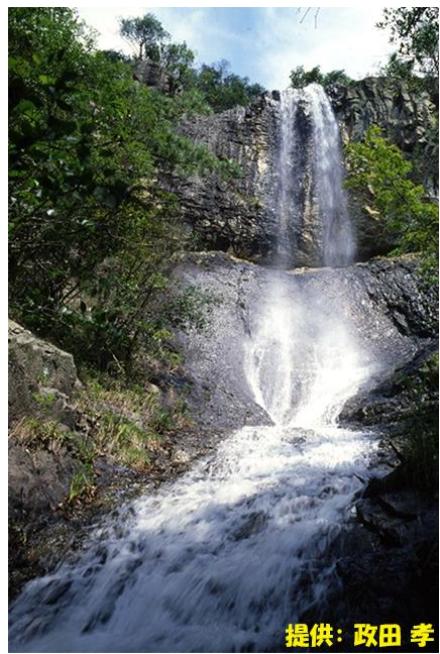
農業6

全国唯一のユニークな農業施設が鏡の州用水湧水池(和気町、文化2(1805)、町史跡)**A**である。防水性の高い「はがね土」によって築かれた長さ130m、高さ4.5m弱の地下堤防によって谷筋の地下水を集めた水が湧き出る池(下の図の赤丸)は、農業用水の水源となっていた。今日的に見れば一種の地下ダムにあたり、斬新な発想と言える。



農業7

農業遺産の最後は、奴久谷大滝(和気町、宝永元-4(1704-07))**B**である。滝のように見えるが、意図的に造られた灌漑用の流路で、滝上部の溜池の栓を抜くことで用水が滝のように流れ落ちる。発案者は、この解説で**舟運3・4、農業2・5、防災1、その他1**の計7項目に関わった津田永忠である(後



提供: 政田孝

楽園も造営したが、対象外なので触っていない)。郡代引退後に奴久谷地区に別邸を建て、地元の農民のために造った灌漑用水路の途中に設けた総高35mの滝を、別邸から見て楽しんだとされる。

防災1

治水という視点では、津田永忠による百間川の開削が全国的に見て重要な事業と言える。岡山城下を旭川の洪水から守るために、旭川左岸の一の荒手(岡山市中区、貞享4(1687)、下の写真)**A**で越流させ、二の荒手を経て放水路「百間川」へと流し、変曲点で中川に合流させるという洪水対策であった。百間川の名称は、二の荒手の左右に設けられた導流堤の幅がちょうど百間あったことからの命名で、長さ約

撮影:馬場俊介 (1996.6.11)





提供:岡山大学附属図書館(池田家文庫)

5.7 キロの放水路は、後世の放水路のように一定幅でもなければ、海まで開削されたわけでもなかった。当初計画では、旭川の越流水を貯蔵する遊水地的性格が強く、溢れた水で耕地が冠水することもあった。上の「旭川東部絵図」は、後楽園が描かれていることから、元禄以降の作図とされている。黄色く塗られた部分が百間川、左端を縦に流れるのが旭川、旭川と黄色の部分の接点が前述の一の荒手である。黄色い河道は絵図の右下で直角に曲がって終わっている。その先は、小河川である中川と合流し、中川の流路を経て児島湾に流出していた。

永忠は、この中川（百間川）の河口部を横断するように、江戸期最大の干拓新田・沖新田（2万8000石）を造営した。その際、増水時にも新田が洪水被害に会わないようにするため、河口部に巨大な遊水地・大水尾〔おおみお〕（岡山市東区、宝永2（1705）以前）Aと6基の樋門群が造られた。樋門群は現存していないが、6基中最大の唐樋は20連もある国内最大の石樋門で、増水時のすみやかな排水を目的としていた。こうした複合的な技術により、机上の理論家であった熊澤蕃山が、かつて愚策としてしおけた大河川の河口部の干拓が可能となった。



撮影:馬場俊介 (2007.6.4)

衛生1

倉敷は井戸の多い市である。特に、かつて島だった地区には古くから井戸が掘られた。著名なものとしては、①乙島の8つの共同井戸の代表的格である泉谷の大井戸（倉敷市、寿永2（1183）以前?）A、②源平藤戸の戦いの際に源氏方の兵士が飲用したとの伝承のある蘇良井戸（倉敷市、元暦元（1184）以前）A、③港町・下津井の北前船への飲料水の供給用の亀井戸（倉敷市、享保3（1803）、市史跡）Aがある。下の写真は蘇良〔そら〕井戸で、軟質の豊島石を円筒形に削抜いた井戸枠が特徴的である。



撮影:小西宏和

その他1

江戸期を代表する藩校である閑谷学校には、日本で最も立派な石壙（備前市、元禄14（1701）、国重文）Aが当初のまま残っている。津田永忠の施工で、延長は505m、学校の敷地を一周している。その顕著な特徴は天端が巻石状になっていることで、理由は不明だが、①排水のため（土壙だと瓦屋根を付けるが石壙なので天端を丸くして内部に水が浸透しにくくした）、②閑谷学校は儒学の殿堂のため儒教様式にしたなどの仮説はあるが定かではない。



撮影:馬場俊介 (1996.9.23)